

第4章 本取組における学生教育の評価

地域活性化GPの取組における「学生教育の目標と養成する人材像のニーズ」は次のようになっている。

育成する項目	目 標	評価の方法
社会人基礎力（アクション、シンキング、チームワーク）	各項目のランクが7以上になること	社会人基礎力診断シート
ビジネス展開能力（企画、提案）	提言が“参考になる”以上の評価を受けること	発表を聞いた地域社会の関係者が評価
専門的技法	基本的知識をもち、実際に使った経験を持つこと	作業過程における教員の評価

4.1 社会人基礎力の評価

社会人基礎力が伸びたかどうかについては、学生に「社会人基礎力診断シート（学生用）アンケート」（参考資料 11）を実施した。また、プログラム推進協議会の構成員であるゼミ担当教員には、同様の「社会人基礎力診断シート（教員用）アンケート」（参考資料 12）を実施した。

アンケートは、取組に参加した79名の学生一人一人を対象に、社会人基礎力の変化を評価する形で実施した。したがって、学生は自己評価（有効回収数69）であり、教員は各ゼミ学生についての評価である。

(1) アクション力の評価

アクション力に関する指標は、[主体性]、[働きかけ力]、[実行力]である。

①主体性

取組に「1. 進んで取り組んだ」と答えている学生は56.5%で、教員評価では51.9%となっている。学生と教員の評価を比較すると、5ポイントほど学生の方が高くなっている。「3. 取り組めなかった」という割合は、教員評価でも3.8%であり、何らかの形では取組に参加していることが分かる。

Q1. [主体性] あなた（この学生）は、進んで取り組みましたか。

	1. 進んで取り組んだ	2. あまり進んで取り組めなかった	3. 取り組めなかった	合 計
学生	39	28	2	69
教員	41	35	3	79
学生	56.5%	40.6%	2.9%	100.0%
教員	51.9%	44.3%	3.8%	100.0%

②働きかけ力

取組の実施にあたって他の人に積極的に働きかけたかどうかについては、「1. 積極的に働きかけた」と回答している学生が18.8%で、教員が31.6%とこの設問では、教員の評価の方が高くなっている。「2. あまり働きかけられなかった」と回答している学生は75.4%で、教員の評価では63.3%となっている。学生に未回答者が10人おり、この学生の多くは、働きかけも弱い学生と思われるので、学生の自己評価の方が若干厳しいと思われる。

[働きかけ力]は、[主体性]や[実行力]に比較して「1. 積極的に働きかけた」学生が少なく、まじめで、こつこつと取組には参加するが、リーダーシップを発揮できる学生が少ない結果となっている。

Q2. [働きかけ力] あなたは、取組の実施にあたって他の人に働きかけましたか。

	1. 積極的に働きかけた	2. あまり働きかけられなかった	3. ほとんど働きかけなかった	合計
学生	13	52	4	69
教員	25	50	4	79
学生	18.8%	75.4%	5.8%	100.0%
教員	31.6%	63.3%	5.1%	100.0%

③実行力

取組にあたって確実に実行できたかどうかについては、「1. 確実に実行できた」と回答している学生が50.7%で、教員が60.8%とこの設問では、教員の評価の方が10ポイントほど高くなっている。「2. あまり実行できなかった」と回答している学生は47.8%で、教員の評価では35.4%となっている。第3章の事例集からも分かるように、取組の過程で学生はつまずきながら進んでいるので、評価が厳しくなっている可能性がある。

Q3. [実行力] あなたは、取組を確実に実行できましたか。

	1. 確実に実行できた	2. あまり実行できなかった	3. ほとんど実行できなかった	合計
学生	35	33	1	69
教員	48	28	3	79
学生	50.7%	47.8%	1.4%	100.0%
教員	60.8%	35.4%	3.8%	100.0%

④アクション力

取組前と比較して、アクション力が「1. 上昇した」と回答している学生は60.9%で、教員は67.1%とアクション力の総合評価でも上昇した学生が多いことが分かる。

今年度は取組2年目で、一部の4年生は昨年度も取組に参加し、すでにアクション力が高い学生もいるため、同様の設問の昨年度の学生の評価ポイント64.1%よりも若干低下している。

Q4. 取組前と比較して、アクション力は、上昇したと思いますか。

	1. 上昇した	2. あまり上昇しなかった	3. ほとんど変化がなかった	合計
学生	42	21	6	69
教員	53	24	2	79
学生	60.9%	30.4%	8.7%	100.0%
教員	67.1%	30.4%	2.5%	100.0%

本取組における学生教育の目標は、得点が7点以上を取ることであった。その基準で見ると、学生の自己評価では40.6%が目標に到達している。また、教員側の評価では51.9%が目標に到達している。6点まで範囲を広げると、学生評価では69.6%、教員評価では65.8%となり、3分の2の学生のアクション力が上昇したことになる。実数で見ると、6点以上の学生は、学生評価では48人、教員評価では52人となっている。

なお、各指標の得点配分については、参考資料11を参照されたい。

アクション力の得点分布(10点満点)

	10点	9点	8点	7点	6点	5点	4点	3点	2点	1点	0点	合計
学生	9	0	19	0	20	2	15	2	1	1	0	69
教員	21	0	20	0	11	0	23	1	0	0	3	79
学生	13.0%	0.0%	27.5%	0.0%	29.0%	2.9%	21.7%	2.9%	1.4%	1.4%	0.0%	100.0%
教員	26.6%	0.0%	25.3%	0.0%	13.9%	0.0%	29.1%	1.3%	0.0%	0.0%	3.8%	100.0%

(2) シンキング力の評価

シンキング力に関する評価項目は、[課題発見力]、[計画力]、[創造力]である。

①課題発見力

課題を「1. 明らかにできた」と回答している学生は62.3%であった。教員評価では50.6%となっている。この結果は、教員評価の方が、サンプルが10人多いことが影響していると思われる。実数で比較すると、「1. 明らかにできた」と回答している学生は43人で、教員評価では40人であり、非常に近似している。

Q5. [課題発見力] あなたは、課題を明らかにできましたか。

	1. 明らかにできた	2. あまり明らかにできなかった	3. ほとんど明らかにできなかった	合計
学生	43	26	0	69
教員	40	35	4	79
学生	62.3%	37.7%	0.0%	100.0%
教員	50.6%	44.3%	5.1%	100.0%

②計画力

課題解決の準備については、「1. 準備できた」と回答している学生が34.8%で、教員評価では43.0%となっている。本学の学生の場合、言われたことはやるが、自分から進ん

で計画し実行する力が弱い傾向がある。この傾向は本学のみならず、今の若者の特徴でもあると思われるが、次の指標の「創造力」同様、自分自身で考える能力の訓練が望まれる。

Q 6. 「計画力」あなたは、課題解決の準備ができましたか。

	1. 準備できた	2. あまり準備できなかった	3. ほとんど準備できなかった	合計
学生	24	43	2	69
教員	34	39	6	79
学生	34.8%	62.3%	2.9%	100.0%
教員	43.0%	49.4%	7.6%	100.0%

③創造力

新しいアイデアを出せたかという質問に対して、「1. 十分出せた」と回答している学生の割合は31.9%で低い結果となっている。それに対して、教員側の評価では、41.8%の学生が「1. 十分出せた」という結果になっている。この結果は、「計画力」と非常に類似したものとなっている。取組段階で、実際には多くの学生がいくつかのアイデアを出せているが、実行に移そうという気概が弱い面が見られる。この点は、昨年度も見られた傾向であり、自分が出しているアイデアの位置づけを明確にできないことが影響しているように思われる。

Q 7. 「創造力」あなたは、新しいアイデアを出せましたか。

	1. 十分出せた	2. あまり出せなかった	3. ほとんど出せなかった	合計
学生	22	43	4	69
教員	33	41	5	79
学生	31.9%	62.3%	5.8%	100.0%
教員	41.8%	51.9%	6.3%	100.0%

④シンキング力

取組前と比較してシンキング力が向上したかどうかについては、「1. 上昇した」と回答している学生は53.6%で、参加学生全体の約半数が、シンキング力が上昇したと考えている。教員評価でも54.4%で非常に似通った結果となっている。昨年は教員評価の方が10ポイント以上高かったことを考えると、取組2年目の学生もおり、調査のこつをつかんだ可能性もある。一方で、上昇したと回答している割合は、学生、教員とも昨年度より低く、成長はしているが、その伸び幅が低下していると感じている面も見られる。

Q 8. 取組前と比較して、シンキング力（課題発見力、計画力、創造力）は、上昇したと思いますか。

	1. 上昇した	2. あまり上昇しなかった	3. ほとんど変化がなかった	合計
学生	37	28	4	69
教員	43	30	6	79
学生	53.6%	40.6%	5.8%	100.0%
教員	54.4%	38.0%	7.6%	100.0%

シンキング力を得点化してみると、目標である7点以上の学生は、学生の自己評価では29名（取組学生全体の42.0%）、教員評価では35名（44.3%）であった。

シンキング力を、考える総合力というように捉えると、十分に満足のいくものとはなっていない可能性がある。ただし、6点まで範囲を広げると、学生評価では66.7%、教員評価では59.5%が含まれる結果となっている。

なお、各指標の得点配分については、参考資料11を参照されたい。

シンキング力の得点分布(10点満点)

	10点	9点	8点	7点	6点	5点	4点	3点	2点	1点	0点	合計
学生	8	0	21	0	17	6	17	0	0	0	0	69
教員	25	0	10	0	12	0	25	2	1	1	3	79
学生	11.6%	0.0%	30.4%	0.0%	24.6%	8.7%	24.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
教員	31.6%	0.0%	12.7%	0.0%	15.2%	0.0%	31.6%	2.5%	1.3%	1.3%	3.8%	100.0%

(3) チームワーク力の評価

チームワーク力に関する指標は、[発信力]、[傾聴力]、[柔軟性]、[状況把握力]、[規律性]、[ストレスコントロール力]である。

①発信力

自分の意見を相手に伝えられたかどうかについて、「1. 十分伝えられた」と回答している学生の割合は49.3%で、教員評価では54.4%となっており、教員評価の方が5ポイントほど高くなっている。昨年度は学生、教員共にほぼ60.0%で、取組2年目ということで、評価が厳しくなっている可能性がある。

Q9. [発信力] あなたは、自分の意見を相手に伝えられましたか。

	1. 十分伝えられた	2. あまり伝えられなかった	3. ほとんど伝えられなかった	合計
学生	34	33	2	69
教員	43	32	4	79
学生	49.3%	47.8%	2.9%	100.0%
教員	54.4%	40.5%	5.1%	100.0%

②傾聴力

相手の意見を聞いたかどうかの傾聴力については、「1. 十分聞いた」と回答している学生の割合は81.2%で、教員評価では78.5%と非常に高くなっている。昨年度もこの指標の評価は高かったが、学生で約5ポイント、教員で約10ポイント高まっている。1年間の経験で共通の話題性をもてるようになってきていることが、一部の教員から報告されている。一方で、「2. あまり聞けなかった」、「3. ほとんど聞けなかった」学生が約2割いるわけで、これらの学生をどのように教育していくかも、基本的な課題として残っている。

Q10. [傾聴力] あなたは、相手の意見を聞けましたか。

	1. 十分聞けた	2. あまり聞けなかった	3. ほとんど聞けなかった	合計
学生	56	12	1	69
教員	62	15	2	79
学生	81.2%	17.4%	1.4%	100.0%
教員	78.5%	19.0%	2.5%	100.0%

③柔軟性

意見の違いなどを理解したかどうかについては、「1. 十分理解した」と回答している学生の割合が69.6%、教員評価では65.8%となっている。昨年度と比較すると教員評価は約5ポイント低下しているが、学生の自己評価では30ポイントほど上昇している。

取組において、明らかに昨年度よりも活発な意見交換がなされているゼミが多く、その結果が学生の自己評価の向上につながっているものと思われる。

Q11. [柔軟性] あなたは、意見の違いなどを理解しましたか。

	1. 十分理解した	2. あまり理解しなかった	3. ほとんど理解しなかった	合計
学生	48	20	1	69
教員	52	24	3	79
学生	69.6%	29.0%	1.4%	100.0%
教員	65.8%	30.4%	3.8%	100.0%

④状況判断力

周囲の人や物事との関係をよく理解したかという質問に対しては、「1. 十分理解した」と回答している学生の割合は37.7%で、教員評価の51.9%よりも低くなっている。この評価は、学生、教員ともに昨年度より大幅に低下しているが、昨年度は短期間の実施であったため、多くのゼミではかなり教員が誘導したが、今年度は4月スタートであり、学生主体での取組となったゼミが多く、様々な経験をした結果と言えなくもない。

また、「2. 一定に理解した」を加えると、学生の自己評価では98.6%が、教員評価では93.7%となっている。

Q12. [状況判断力] あなたは、周囲の人や物事との関係を良く理解しましたか。

	1. 十分理解した	2. 一定に理解した	3. ほとんど理解しなかった	合計
学生	26	42	1	69
教員	41	33	5	79
学生	37.7%	60.9%	1.4%	100.0%
教員	51.9%	41.8%	6.3%	100.0%

⑤規律性

ルールや約束を守ったかどうかについては、「1. 守った」と回答している学生の割合が65.2%で、昨年度よりも10ポイントほど低下しているが、教員評価では81.0%と昨年度とほぼ同様の結果となっている。この点についても取組の進め方が影響しているものと思われる。繰り返しになるが、昨年度は教員の指示であるため、学生はやらざるを得ないが、今年度は教員の指示もあるが、学生同士の話し合い（学生自身によるサブゼミ）も多く実施されていた。

Q 13. [規律性] あなたは、ルールや約束を守りましたか。

	1. 守った	2. あまり守れなかった	合計
学生	45	24	69
教員	64	15	79
学生	65.2%	34.8%	100.0%
教員	81.0%	19.0%	100.0%

⑥ストレスコントロール力

ストレスをうまく解消できたかという質問に対して「1. うまく解消できた」と回答している学生の割合は58.0%で、教員評価の67.1%を10ポイントほど下回っているが、学生の自己評価で見ると、昨年度よりも10ポイントほど高くなっており、2年目を迎えて成長が見られる。

Q 14. [ストレスコントロール力] あなたは、ストレスをうまく解消できましたか。

	1. うまく解消できた	2. あまり解消できなかった	合計
学生	40	29	69
教員	53	26	79
学生	58.0%	42.0%	100.0%
教員	67.1%	32.9%	100.0%

⑦チームワーク力

取組前と比較して、チームワーク力が上昇したかどうかについては、学生の69.6%が「1. 上昇した」と回答している。教員評価では63.3%となっており、それなりにチームワーク力は上昇したと考えられる。

Q 15. 取組前と比較して、チームワーク力は、上昇したと思いますか。

	1. 上昇した	2. あまり上昇しなかった	3. ほとんど変化がなかった	合計
学生	48	14	7	69
教員	50	24	5	79
学生	69.6%	20.3%	10.1%	100.0%
教員	63.3%	30.4%	6.3%	100.0%

また、チームワーク力を得点化してみると、目標である7点以上の学生割合は、学生の自己評価では73.9%、教員評価では78.5%であった。昨年度と比較して、学生では約10ポイント割合が高まっている。教員評価については昨年度とほぼ同じである。

得点を「アクション力」や「シンキング力」と比較すると、「チームワーク力」の得点が学生、教員ともに最も高くなっている。1つのプロジェクトを共同で遂行することに協力的であった学生は、それなりの成長をしたと思われるが、一部の学生は問題を残したままであった。この点を、どのようにしていくかが、まだまだ課題として残されているであろう。なお、各指標の得点配分については、参考資料11を参照されたい。

チームワーク力の得点分布(10点満点)

	10点	9点	8点	7点	6点	5点	4点	3点	2点	1点	0点	合計
学生	12	14	12	13	8	2	6	1	1	0	0	69
教員	19	19	13	11	5	4	4	2	1	1	0	79
学生	17.4%	20.3%	17.4%	18.8%	11.6%	2.9%	8.7%	1.4%	1.4%	0.0%	0.0%	100.0%
教員	24.1%	24.1%	16.5%	13.9%	6.3%	5.1%	5.1%	2.5%	1.3%	1.3%	0.0%	100.0%

(4) 3つの社会人基礎力の比較

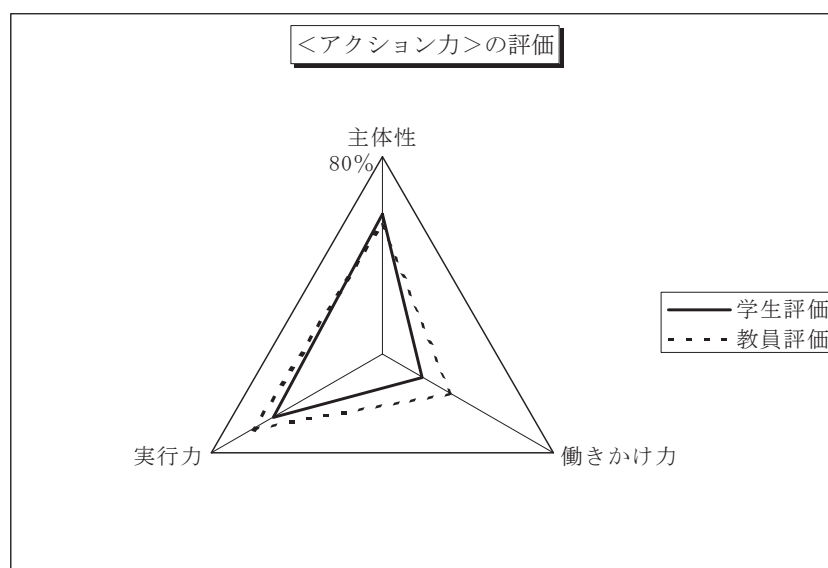
以上3つの社会人基礎力の評価結果を図示すると、次のとおりである。

①アクション力

アクション力では、働きかけ力の評価が、学生、教員ともに低くなっている。この結果から見ると、取組に対して、学生は進んで取り組んだと知っているが、教員は若干厳しい見方をしている。成果（実行力）に対しては教員の方が高い評価をしているが、働きかけ力については、今後どうやって積極性をつけさせていくかが課題として残っている。

<アクション力>の評価

		学生評価	教員評価
主体性	進んで取り組んだ学生の割合	56.5%	51.9%
働きかけ力	積極的に働きかけた学生の割合	18.8%	31.6%
実行力	確実に実行出来た学生の割合	50.7%	60.8%



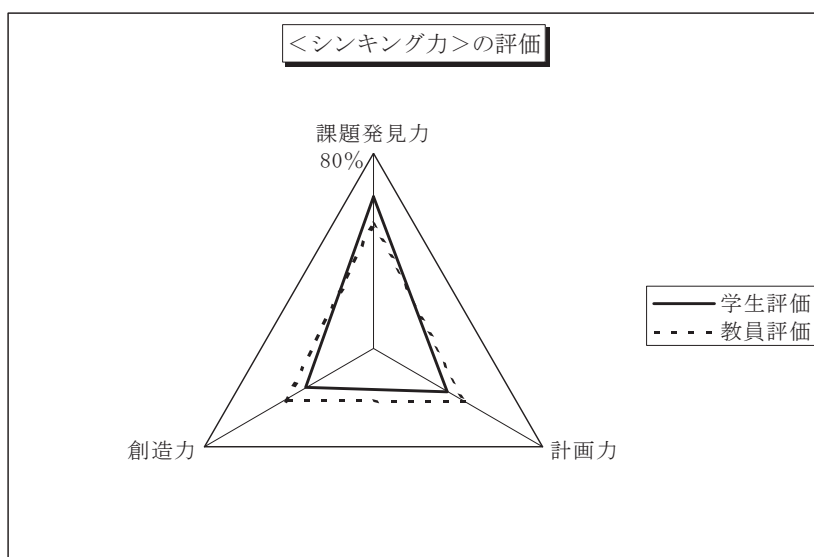
②シンキング力

シンキング力では、計画力、創造力の評価が、学生、教員ともに低くなっている。この結果から見ると、課題は見つげられたが、自分で計画して課題に立ち向かい、課題解決ができた学生は残念ながら少ないということになる。

昨年度と比較して教員の評価結果はほぼ同様になっているが、学生の自己評価では課題発見力の評価は上昇しているが、計画力や創造力の評価は低下している。もちろん、取り組んでいる学生が半数以上異なるので、何とも言えない部分はあるが、今年度の方が学生の独自性を求めた結果と解釈すれば、その力のなさを冷静に判断できたことは良いことと評価できる。

<シンキング力>の評価

		学生評価	教員評価
課題発見力	明らかにできた学生の割合	62.3%	50.6%
計画力	準備できた学生の割合	34.8%	43.0%
創造力	十分出せた学生の割合	31.9%	41.8%



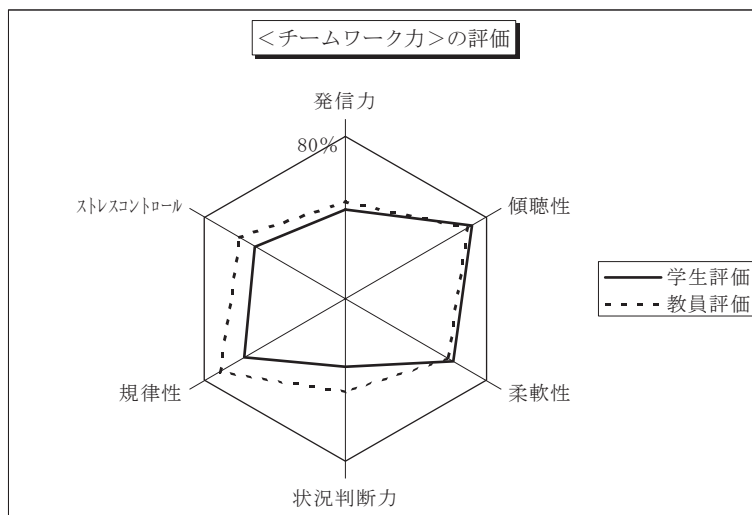
③チームワーク力

チームワーク力では、状況判断力と規律性での学生と教員の評価の違いが大きい。また、ストレスコントロール力でも10ポイント近い差ができています。いずれも、学生の方の自己評価が低くなっており、教員が持っている基準と比較して、取組に参加した学生の成長が実感できている可能性がある。学生の自己評価が、教員評価よりも相対的に低いという傾向自体は悪いことではない。

学生の自己評価も同様であるが、教員の評価が状況判断力と発進力で低い点は、今後指導を強めていく必要があるであろう。

<チームワーク力>の評価

		学生評価	教員評価
発信力	十分伝えられた学生の割合	49.3%	54.4%
傾聴性	十分聞けた学生の割合	81.2%	78.5%
柔軟性	十分理解した学生の割合	69.6%	65.8%
状況判断力	十分理解した学生の割合	37.7%	51.9%
規律性	守った学生の割合	65.2%	81.0%
ストレスコントロール	うまく解消できた学生の割合	58.0%	67.1%

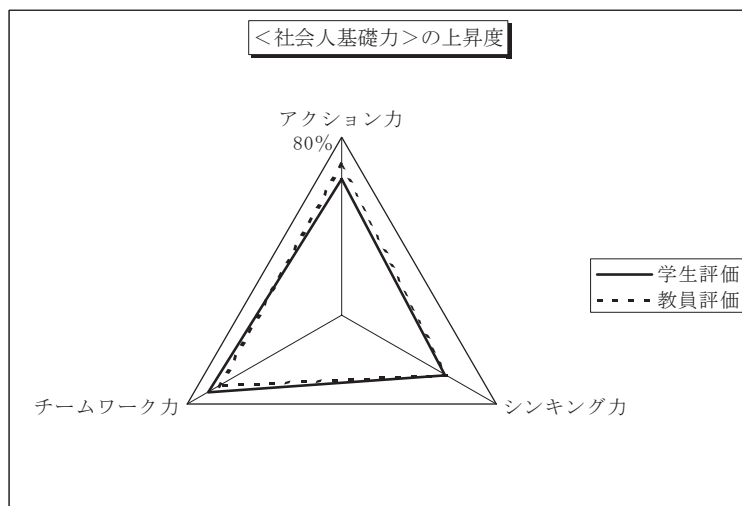


④ 社会人基礎力の上昇度

3つの社会人基礎力の上昇度（取組前と取組後の比較）を比べると、シンキング力の上昇度は55%弱であり、アクション力、チームワーク力よりも低い結果となっている。取組には中間報告、最終報告、報告書の作成という期限があり、どうしても教員が手を出さないとうまくいかない面もあるが、考えさせる教育方法の検討が必要であろう。

<社会人基礎力>の上昇度

		学生評価	教員評価
アクション力	上昇した学生の割合	60.9%	67.1%
シンキング力	上昇した学生の割合	53.6%	54.4%
チームワーク力	上昇した学生の割合	69.6%	63.3%



4.2 ビジネス展開能力の評価

ビジネス展開能力（企画、提案）については、『成果発表会』において、参加者（地域連携アドバイザーないしは推進協議会委員、一般参加者、本学学生、本学教職員）に対して、「地域活性化G Pプログラム成果発表会意見シート（参考資料13）」にて、提言の評価等をいただいた。

意見シートは、参加者 210 名に対して、127 名回収できた。回収率は 60.5%である。当日は以下の 10 取組の発表がなされた。なお、このタイトルは、『成果発表会』時のもので、その後、アドバイザー等からの指導を受けて、最終報告書では変更した取組もある。

- < 鯉江康正ゼミ > 『まちの駅』による地域活性化方策の検討
- < 田邊 正ゼミ > 長岡市における特産品の東京市場販売計画
 - －長岡を売り込み首都圏とつなぐ－
- < 高橋治道ゼミ > ICT活用による安全・安心に向けた検討
- < 児嶋俊郎ゼミ > 若者の就労・自立支援
- < 平野順子・菊池いづみゼミ >
 - 若年者の雇用問題～なぜ若者が職場に定着しないのか～
- < 伊吹勇亮ゼミ > 長岡をより文化的な都市とするために
- < 吉盛一郎ゼミ > 環境負荷が軽減されたまちづくり
 - －ISO14000 シリーズ取得事業所へのアンケート調査と環境会計報告書のすすめ－
- < 石川英樹ゼミ > 長岡の中心市街地活性化に向けて
- < 権 五景ゼミ > 浜松にあって長岡にないもの
- < 岡野宏昭ゼミ > 長岡市民観光意識調査と
 - 長岡まつり大花火大会による観光振興戦略

(1) 取組テーマ（タイトル）と内容の合致

取組テーマ（タイトル）と内容の合致については、「1. 合致していた」との回答（延べ人数：109 人×10 取組）が全体で 87.1%であった。

Q1. 取組テーマ（タイトル）と内容は合致しておりましたか

		1. 合致していた	2. あまり合致していなかった	3. 合致していなかった	小計	無回答	合計
実数	アドバイザー	149	27	2	178	1	179
	一般参加者	319	53	6	378	11	389
	本学学生	482	55	6	543	6	549
	本学教職員	126	13	0	139	0	139
	無回答	14	0	0	14	0	14
	合計	1090	148	14	1252	18	1270
構成比 (%)	アドバイザー	83.7	15.2	1.1	100.0		
	一般参加者	84.4	14.0	1.6	100.0		
	本学学生	88.8	10.1	1.1	100.0		
	本学教職員	90.6	9.4	0.0	100.0		
	無回答	100.0	0.0	0.0	100.0		
	合計	87.1	11.8	1.1	100.0		

回答者の属性別にみると、若干ではあるが「地域連携アドバイザーないしは推進協議会委員（以下、アドバイザー）」が厳しい見方をしているようである。これらの方は、そのテーマの専門の方が含まれているので、当然の結果と思われる。それを受けて、取組によっては、最終報告書の作成に向けて再検討を加えたところもあった。なお、構成比は無回答を除く形で計算した。

(2) 取組に対する参加者の興味

属性別にみた各取組への興味については、専門性が高いことから「1. 興味がある」という回答は、アドバイザーの方がもっとも高かった。本学学生については、他のゼミがどのような取組をしているのかが分からないことも影響した可能性があり、「1. 興味がある」という回答は 65.0%にとどまっている。しかしながら、昨年度よりも5ポイントほど高まっており、中間発表会を実施した効果が多少ともみられる。

Q2. この取組に興味をもてましたか

		1. 興味がある	2. どちらかといえば、興味がない	小計	無回答	合計
実数	アドバイザー	164	13	177	2	179
	一般参加者	326	58	384	5	389
	本学学生	355	191	546	3	549
	本学教職員	119	20	139	0	139
	無回答	12	2	14	0	14
	合計	976	284	1260	10	1270
構成比 (%)	アドバイザー	92.7	7.3	100.0		
	一般参加者	84.9	15.1	100.0		
	本学学生	65.0	35.0	100.0		
	本学教職員	85.6	14.4	100.0		
	無回答	85.7	14.3	100.0		
	合計	77.5	22.5	100.0		

(3) 発表の仕方

発表については、「1. 非常に優れていた」、「2. 優れていた」を加えると 80.6%になる。この評価はかなり厳しいものではあるが、多くの学生が、壇上で一般市民をも含めた方々の前での発表は初めての経験であり、一応の評価はできるものと思われる。

Q3. 発表の仕方はどう感じましたか

		1. 非常に優れていた	2. 優れていた	3. やや問題あり	4. 問題外	小計	無回答	合計
実数	アドバイザー	41	104	32	1	178	1	179
	一般参加者	81	206	85	5	377	12	389
	本学学生	136	326	76	7	545	4	549
	本学教職員	25	78	35	0	138	1	139
	無回答	4	8	2	0	14	0	14
	合計	287	722	230	13	1252	18	1270
構成比 (%)	アドバイザー	23.0	58.4	18.0	0.6	100.0		
	一般参加者	21.5	54.6	22.5	1.3	100.0		
	本学学生	25.0	59.8	13.9	1.3	100.0		
	本学教職員	18.1	56.5	25.4	0.0	100.0		
	無回答	28.6	57.1	14.3	0.0	100.0		
	合計	22.9	57.7	18.4	1.0	100.0		

(4) 取組の提言内容に対する感想

ビジネス展開能力の目標は、提言が「参考になる」以上の評価を受けることである。

提言内容について、「1. 非常に参考になった」、「2. 参考になるものであった」を加えると、全体で 83.0%に達している。本学学生についてみると 83.7%であり、興味を聞いた質問よりも2割も増加している。この結果からも、シンポジウム等への参加機会や学生間の交流機会を増やしていくことが、学生の興味を引き起こし、社会人基礎力を向上させたり、ビジネス展開能力を養成するために必要であると思われる。

Q4. 取組の提言内容について、あなたの感想をお聞かせください

		1. 非常に参考になった	2. 参考になるものであった	3. あまり参考にならなかった	4. 提言がなされていない	小計	無回答	合計
実数	アドバイザー	42	111	22	1	176	3	179
	一般参加者	92	215	65	8	380	9	389
	本学学生	146	311	83	6	546	3	549
	本学教職員	41	73	21	4	139	0	139
	無回答	4	7	3	0	14	0	14
	合計	325	717	194	19	1255	15	1270
構成比 (%)	アドバイザー	23.9	63.1	12.5	0.6	100.0		
	一般参加者	24.2	56.6	17.1	2.1	100.0		
	本学学生	26.7	57.0	15.2	1.1	100.0		
	本学教職員	29.5	52.5	15.1	2.9	100.0		
	無回答	28.6	50.0	21.4	0.0	100.0		
	合計	25.9	57.1	15.5	1.5	100.0		

(5) 提言の実現可能性

提言の実現可能性については「1. 十分実現可能性はある」が全体で 33.8%、「2. 一部修正すれば実現可能性はある」が 43.6%であり、両者を合わせると 77.4%になる。しかしながら、やや抽象的で具体策がない、提言はしているが言い放しであるという意見もあり、今後検討していく必要があるだろう。

アドバイザーの評価では、「1. 十分実現可能性はある」が 29.1%、「2. 一部修正すれば実現可能性はある」が 51.4%で、両者を合わせると 80.6%で、昨年度の 67.6%を10ポイント以上上回っている。今年度は取組2年目であり、昨年度よりも連携を深めて有為な提言を行っていくことができたと思われる。

Q5. 提言の実現可能性について、あなたの感想をお聞かせください

		1. 十分実現可能性はある	2. 一部修正すれば実現可能性はある	3. 実現は難しそうである	4. そもそも提言がなされていない	小計	無回答	合計
実数	アドバイザー	51	90	31	3	175	4	179
	一般参加者	113	154	95	16	378	11	389
	本学学生	200	226	100	7	533	16	549
	本学教職員	45	67	22	5	139	0	139
	無回答	10	3	1	0	14	0	14
	合計	419	540	249	31	1239	31	1270
構成比 (%)	アドバイザー	29.1	51.4	17.7	1.7	100.0		
	一般参加者	29.9	40.7	25.1	4.2	100.0		
	本学学生	37.5	42.4	18.8	1.3	100.0		
	本学教職員	32.4	48.2	15.8	3.6	100.0		
	無回答	71.4	21.4	7.1	0.0	100.0		
	合計	33.8	43.6	20.1	2.5	100.0		